「甦りの主イエス・キリスト」

マルコによる福音書１６章1-８節

森島　牧人　牧師

イースターの今日、与えられた聖書はマルコ福音書１６：１－８で、「復活する」という小見出しがあります。その聖書箇所の最後、それは同時にマルコ福音書の最後の言葉でもあるのですが、「恐ろしかったからである」に耳を傾け、学びたいと思います。

イースターは喜びの知らせであり、その喜びの知らせを語っているのが福音書です。そのような福音書の一つであるマルコ福音書の最後の言葉が「恐ろしかったからである」というのは奇妙であり不思議でもあって、私たちに何故だろうと思わせるのですが、この「何故」というところにこそ聖書の重要なポイントがあります。何が恐ろしかったのか、それは復活・福音の喜びとどのような関係にあるのか、見て行きましょう。

キリスト教の起源でもあり、中心にあるもの、それは主イエスが復活されたという復活信仰です。主イエスが何度もご自身の復活に言及されていることは聖書に明らかですが、弟子たちを始め主イエスの近くにいた誰もがそれを信じていませんでした。その事実を告げられた後の「恐ろしかったからである」という言葉からも主イエスの復活がどれほど予測されていないことであったかが分かります。

さて、主イエスの死から３日目の安息日が解かれた早朝、主の死を間近で見た婦人たちの中の数人が遺体に塗るための香料などを持って墓へ向かっていました。その頃、主イエスの捕縛の際に逃げ去った弟子たちは、主の死を伝え聞いて、全ては終わったと絶望のどん底にいたのです。墓へ急ぐ婦人たちの中にも主の復活を期待している者はおらず、彼女たちの気がかりは、墓の前に置かれた大きな石を誰が動かしてくれるだろうということでした。墓の前に人間に対する絶対的な力・最終的な力である「死」を象徴する大きな石が置かれていたからです。「ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。」（マルコ１６：４）と聖書にあるように、彼女たちが墓に行ってみると石は既に動かされて墓の前にはありませんでした。神の御子が死んでおられる間に「絶対的であった死が崩される」という御業が既に成し遂げられていたのです。

聖書には、婦人たちが墓に入ると、そこに主イエスの遺体はなく、白い衣を着た若者がいて、驚く彼女たちに「あの方は復活なさって、ここにはおられない。・・・さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」（同１６：６－７）と言ったとあり、また「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上り、正気を失っていた。そして、だれにも言わなかった。恐ろしかったからである。」と記して、記者マルコは福音書を結んでいます。

逃げる婦人たちの背後からであったろう「ガリラヤで・・・お目にかかれる」という若者の声。ここで私たちが知らされるのは、この「ガリラヤで」とは、復活の主は私たちが罪も過去もそのままで生きて行ける場所に先回りして私たちを待っておられるということ、それ故、私たちにとってのガリラヤとは、私たちが神の家族として共に生きる場所、教会であるということです。

主イエスが、主を否定し裏切ったペトロの故郷ガリラヤへ先に行き待っておられるという伝言、ペトロと弟子たちはその場所、ガリラヤへ向かって急ぐことになります。